

6 果房の被覆によるブドウ晩腐病の防除（園試果樹部）

(1) 背景

晩腐病の発生は、ブドウの品質、収量に及ぼす影響が大きく、致命的な損害を与えることが多い。

本病に対する防除としては、主として有機ひ素剤の散布に依存し、休眠期および主要な感染期に数回散布する方法がとられてきたが、防除適期を把握することがきわめて困難なことから、本病が雨媒伝染性の病害であることのため、薬剤のみによる適確な防除効果を上げることができなかった。

このため、物理的な感染回避の手段として、果房の被覆による発病防止の効果を検討した結果、明らかに防除効果の向上が認められたので指導上の参考に供する。

(2) 技術内容

- 1) 6月下旬頃、果房（果実の大きさは小豆大）を被覆する。被覆資材は紙袋（ブドウ用果実袋）か紙かさ（15cm四方）を用いる。
- 2) 被覆前に有機ひ素剤を散布して第1次感染をできるだけ防除しておく。なお、被覆後は晩腐病防除の有機ひ素剤散布が省略できる。
- 3) 適応地域
県下全域（とくに晩腐病の激発園）

(3) 指導上の留意点

- 1) 雨媒による第1次感染を効果的に防ぐため、果房への被覆処理は時期を失わないよう6月下旬までに行う。
- 2) 有袋の場合は処理前に摘房、整房などの果房の手入れを終了しておく。なお、かさかけ処理のものについては処理後でも随時果房の手入れをする。
- 3) 収穫は果房が被覆されたまま行い、選果、箱詰めの際除覆する。
- 4) 被覆に要する経費の概算（10アール当たり）
 - ア 有袋の場合……袋代（7,000枚×2.42円＝16,940円）
労賃（5人×3,500円 17,500円）
計 34,440円
 - イ 紙かさの場合……かさ代 21,000円
労賃 2人×3,500円＝7,000円
計 28,000円
- (5) 果房、被覆によって処理後の晩腐病防除剤の散布が省略できること、農薬による果房の汚染がほとんどないことなどの有利性が期待できる。

(4) 試験成績の概要

- 1) 前年の激発ほ場であるため、菌密度はきわめて高かったが、本年は夏期に高温、乾燥が続いたため、熟期が平年に比べ約10日位早まり、この時期の感染が少なく、少発生条件となった。
- 2) 有機ひ素剤の防除期と発病との関係では、明らかな傾向は見られず、初期防除や生育前期の防除の省略区（B区、C区）に比べ慣行防除区（A区）がむしろ劣った。無散布の発病状況などから判断し、...熟期に近づいた生育後期の防除効果をもっと高いものと推定される。
- 3) 有袋による防除効果はいずれもすぐれているが、とくに、初期防除を実施したのち有袋した区（F区）での効果をもっともすぐれ、次いで通年防除と有袋併用区（G区）での効果がすぐれた。

(5) 主要成果の具体的データ

第1表 防除体系の有袋の組合せによる発病防止効果

区別（防除体系）	調査房数	発病房率	発病度※
A区（慣行防除）	200	14.5%	3.1
B区（休眠期防除省略）	200	8.0	1.7
C区（初期防除省略）	200	9.0	1.3
D区（有袋のみ）	200	6.5	0.9
E区（休眠期防除+有袋）	200	8.0	1.1
F区（初期防除+有袋）	200	3.5	0.5
G区（通年防除+有袋）	193	5.2	0.7
H区（無散布+有袋）	45	11.1	2.2
I区（無散布）	122	26.2	5.6

※ 発病程度を次の基準に従って類別し、指数を与えて発病度を算出した。

発病程度	少	指数(1)	発病程度	多	指数(3)	$\text{発病度} = \frac{\sum (\text{指数} \times \text{該当房数})}{4N} \times 100$
	中	(2)		甚	(4)	

第2表(参考成績)

果房のかさかけによる発病防止効果(山形園試S.52)

かさかけ の有無	8月11日調査			8月22日調査		
	調査果房数	発病房率	発病度	調査果房率	発病房率	発病度
有	478	10.5%	2.77	561	19.6%	5.04
無	830	29.2	11.36	784	52.4	20.63

品種：ジベ処理デラウェア，1区75m²

処理：6月30日，第2回ジベ処理直後，果房に紙かさ(15cm四方)をかけた区とかけない区を設けた。薬剤散布は同一とした。

調査：8月11日，8月22日の2回晩腐病の発病を調査した。